

「保育者養成ピアノ教育における教材の再検討 ～福井県内ピアノ講師に対するアンケート調査、バイエルとの比較」

河野 久寿・木下 由香・*西尾 順子・*太田 佳代・
*福田安希子・*福岡 智子・*清水由紀子・*大城 修子

(2017年12月27日受理)

「Re-examination of Teaching Materials in Piano Education for Nursery Teacher Training ～Questionnaire Survey on Piano Instructors in Fukui Prefecture and Comparison with Beyer」

Hisatoshi KAWANO, Yuka KINOSHITA, Junko NISHIO, Kayo OHTA,
Akiko FUKUDA, Tomoko FUKUOKA, Yukiko SHIMIZU, Shuko OHKI

要旨：仁愛女子短期大学幼児教育学科において入学時ピアノが弾ける学生の割合は年々低下している。教材は『バイエル』抜粋による教則本を長年使用している。現代において数多くの教則本が存在する中で果たして初心者向けの教材として『バイエル』は最適なのか探るべく、福井県内のピアノ講師に対するアンケート調査を行った。その結果、主教材としてバイエルは依然として根強く使用されており、特に大人初級レベルでは大部分を占めていることや、併用教材として、『バーナム』の使用率が高く、テクニック強化目的の『ツェルニー』『ハノン』『ブルクミュラー』も使用されている事が分かった。

Key words：保育者養成 ピアノ教育 ピアノ教材 福井県 アンケート調査 バイエルピアノ教則本
Nursery teacher training course Piano education Piano teaching materials
Fukui Prefecture Questionnaire survey Beyer course of instruction

1. はじめに

本学幼児教育学科保育士養成課程教科目「器楽Ⅰ」では、入学時の学生の音楽レベルによってグレードを分けピアノ教育を行っている。年毎のグレード別人数割合の推移調査では、ピアノ初心者（入学時全くピアノが弾けない学生）は、平成24年度31.2%、平成25年度33.5%、平成26年度37.5%、平成27年度38.4%、平成28年度44.1%、平成29年度46%と推移しており、初心者の比率が増え、高いレベルの学生の比率も下がることから学生の入学時におけるレベル低下が分かる。準備不足は保育士を志望する

者としての意識欠如であるが、結果として入学してからピアノに取り掛かる学生が多いのが現状である。当然ながらピアノ技術の習得は一夜漬けで出来るものではなく、絶対的な練習時間、こつこつと毎日練習する努力が必要であり、ピアノで苦しむ学生も多い。「器楽Ⅰ」では、グレード分けピアノは個人レッスン方式によるグループ指導（3人程度45分）、MLでの演習授業（グループによる集団演習45分）を行っている。数年前より履修曲数の増加や、実技試験における評価の厳格化、ML（ミュージックラボラトリーシステム）を平成28年度より新

*仁愛女子短期大学 非常勤講師

設するなど、学生のピアノ技術向上に力を入れている。また入学前の高校生への対策として、高短連携での機会や入学前教育等でのピアノ入学前練習の説明や、弾き歌い実習曲の配布等を行っている。

本学器楽部会では初心者多数者が増える現状を鑑み、入学後学生に対するピアノ教育強化の方策としてより良い教材の再検討を行うこととなった。本学では初心者向けに『バイエル』『ブルクミュラー』抜粋による教則本『Newおとなのためのピアノレッスン』を長年使用している。『バイエル』については後の項目にて記すが、長い歴史を持つ教則本であり、未だ教育現場や、保育士採用試験、教員採用試験などで用いられている。このことから目安として本学でも長年使用されている。しかし、『バイエル』に批判的な文献もみられる。教材も時代によって変遷するものであり、ピアノ教育の本流から外れないために、本研究では、初心者子ども向け初級・中級、中学生以上を大人と定義した初級・中級向けの教材について、福井県内ピアノ講師に対するアンケートを実施し広く意見を募った上で、『バイエル』以外の有効な教材を探り、その結果の上位にある教材をいくつか取り上げ、その特長や『バイエ

ル』との比較について分析した。その結果を踏まえて、特に初心者学生のピアノ技術向上を目標とした教材について検討する。アンケート実施は、郵送（仁愛女子短期大学同窓会協力）や福井県内音楽教室への持ち込み、関係者への手渡しにて行った。

2. ピアノ教材アンケート集計結果

（1）回答者の内訳

120名分の回答数が得られた。年代別にみると、40歳代講師の回答が最も多く、50名と全体の42%を占めた。また、年齢と講師歴の関係はほぼ合致しており、今回のアンケート回答者は30～40歳代の講師歴10～20年の中堅レスナーが約65%を占めた。

表1 年代別人数

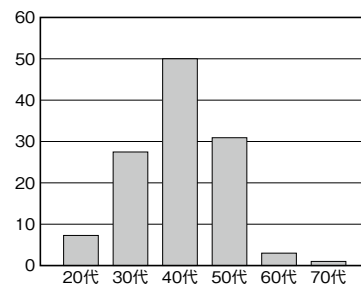


表2 年代別比率

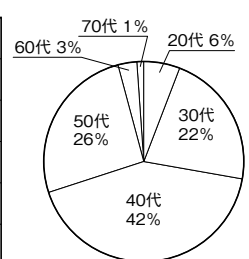


表3 講師歴人数

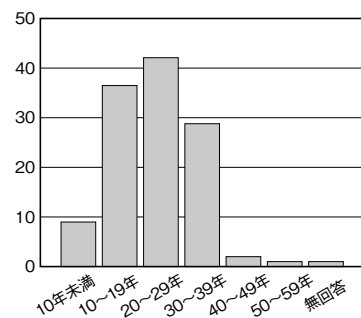
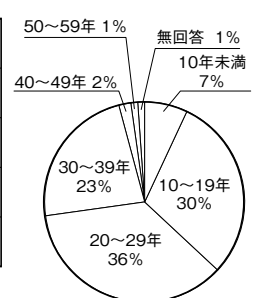


表4 講師歴人数比率



（2）『バイエル』について

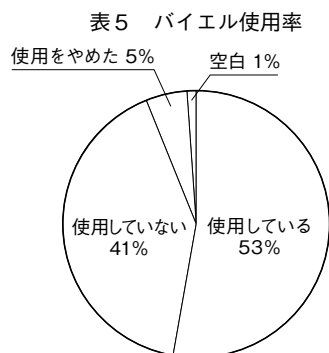
バイエルを使用していると回答したのは63名で、全体の53%を占めた。バイエルを使用していないと回答したのは49名、途中で使用をやめたと回答したのは6名で、全体の46%を占めた。バイエルを使用している理由として、保育者養成校・小学校教員養成校においてバイエルを使用しているからという記述が散見された。

福井県内ピアノ講師を対象とした
教材（楽譜）についての調査アンケート

- 講師の年代（20代、30代、40代、50代、60代、その他）
講師歴（年）
- 対象者に対する主たる教材として使用している楽譜名を下記枠内より番号にてお答え下さい。
子供「小学生」の初級（ ） 大人「中学生以上」の初級（ ）
子供「小学生」の中級（ ） 大人「中学生以上」の中級（ ）
1. バイエル 2. パーナム 3. ぴあのどりーむ 4. オルガン・ピアノの本
5. ピアノランド 6. バスティーニシリーズ 7. トンブソン 8. メソードローズ
9. フェルニー 10. ブルクミュラー 11. ソナチネ 12. キロック
13. その他（ ） 14. その他（ ）
- 上記の対象者に対して、その楽譜を使用していた点、悪かった点、または選んだ理由や悩みをお聞かせ下さい。（自由記述）
- 併用教材として使用している楽譜名を上記枠内より番号にてお答え下さい。
子供「小学生」の初級（ ） 大人「中学生以上」の初級（ ）
子供「小学生」の中級（ ） 大人「中学生以上」の中級（ ）
- バイエルについてお尋ねします。
バイエルを教材として使用している方はその理由（利点など）、主の教材として使用しているかを、使用していない、または使用を止めた方はその理由をお聞かせ下さい。（自由記述）

ご協力ありがとうございました。

図1 アンケート調査用紙



(3)【主教材】について

主教材については、初級レベルにおいて『ぴあのどリーむ』『オルガン・ピアノの本』、ヤマハ音楽教室で使用される『ピアノスタディ』が多く使用されている。

子ども中級レベルにおいては『ブルクミュラー』の使用が突出していた。大人初級レベルでは『バイエル』の使用が大部分であった。大人中級レベルでは『ソナチネ』『ブルクミュラー』『ツェルニー』『ハノン』の順に使用されている。

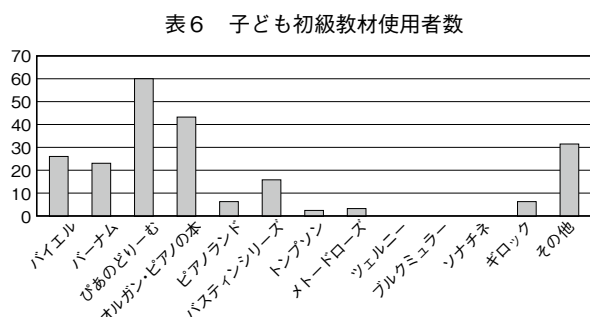


表7 子ども初級その他の教材使用者数

ピアノスタディ	20
ピアノひけるよ	6
なかよしピアノ	3
ピアノの森	1
よいこのピアノ	1
キッズピアノ	1
サウンドツリー	1
ピーターラビットと学ぶはじめての教本	1
ハノン	1

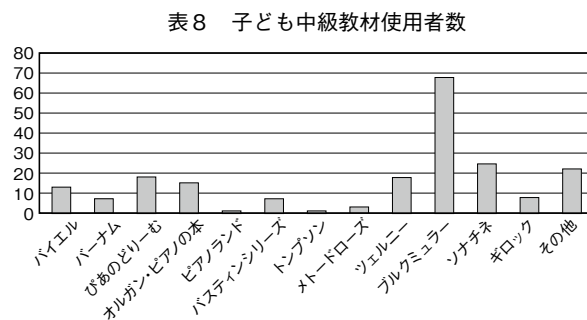


表9 子ども中級その他の教材使用者数

ピアノスタディ	10
ハノン	5
ピアノの練習ABC	3
ブレ・インヴェンション	1
やさしいインベンション	1
インヴェンション、シンフォニア	1
サウンドツリー	1
ラジリティー	1
ピアノひけるよ	1
ドレミランド、ピアノスポーツ	1

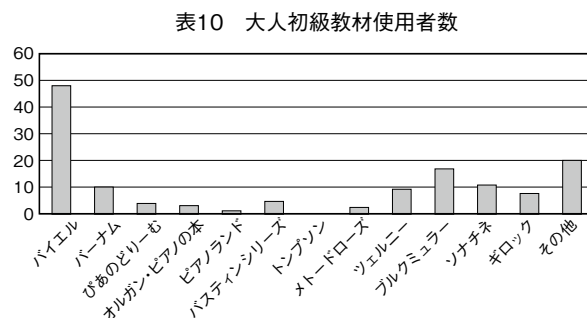


表11 大人初級その他の教材使用者数

大人のピアノ教本（橋本晃一編）	7
個人にあわせる	5
ハノン	4
ピアノスタディ	3
大人のためのピアノレッスン	2

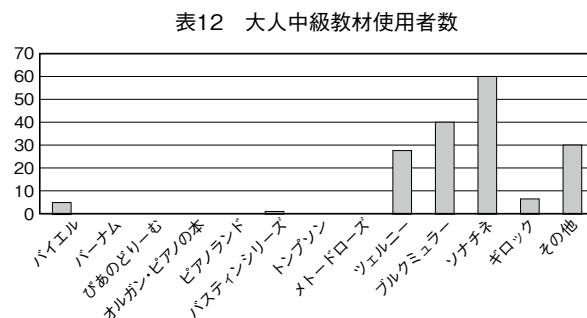


表13 大人中級その他の教材使用者数

ハノン	6
ソナタ	6
自選曲	5
ピアノスタディ	2
ピアノの練習ABC	2
ラジリティー	1
大人のためのピアノ教本	1
やさしいインベンション	1
インヴェンション、シンフォニア	1
4期のピアノ名曲集	1
月刊ピアノ	1
ポップス、ジブリ	1

(4)【併用教材】について

併用教材については、子ども大人いずれにおいても『バーナム』の使用率が高い。また『ツェルニー』や『ハノン』といった、いわゆるテクニックを強化する目的の教材が使用される傾向にある。

表14 子ども初級教材使用者数

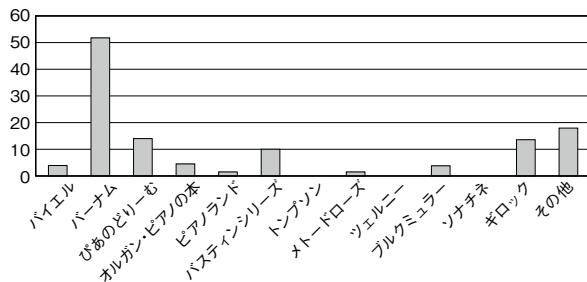


表15 子ども初級その他の教材使用者数

ハノン	4
プレ・インヴェンション	2
ピアノスタディ	2
やっぱりピアノが好き	2
ピアノの森	2
ピアノひけるよ！ジュニア	2
歌えるひけるピアノ曲集	1
ピアノのテクニック	1
きらきらピアノこどもの名曲集	1
バスティンベーシックプリマーA	1
きっずピアノ	1
ジブリなどの曲集	1
アルフレッド	1
ゆびのたいそう	1

表16 子ども中級教材使用者数

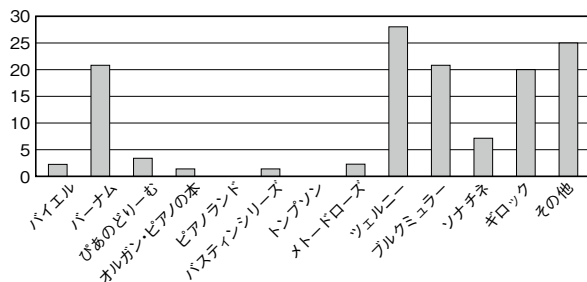


表17 子ども中級その他の教材使用者数

ハノン	13
プレ・インヴェンション	4
バッハインヴェンション	4
ピアノの練習ABC	3
ピアノスタディ	2
やっぱりピアノが好き	1
ピアノの森	1
4期のピアノ名曲集	1
ピアノのテクニック	1
自選曲	1

表18 大人初級教材使用者数

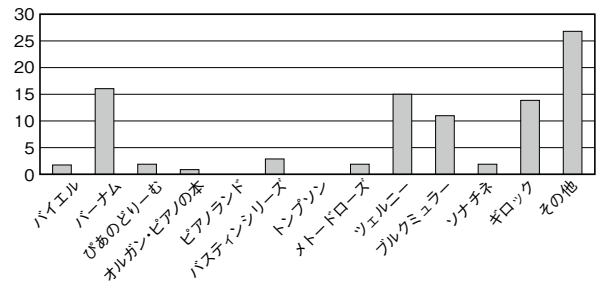


表19 大人初級その他の教材使用者数

ハノン	8
自選曲	7
ポップス	3
バッハ	2
大人のためのピアノ教本	2
ピアノスタディ	1
ピアノの森	1
4期のピアノ名曲集	1
ピアノのテクニック	1
月刊ピアノ	1

表20 大人中級教材使用者数

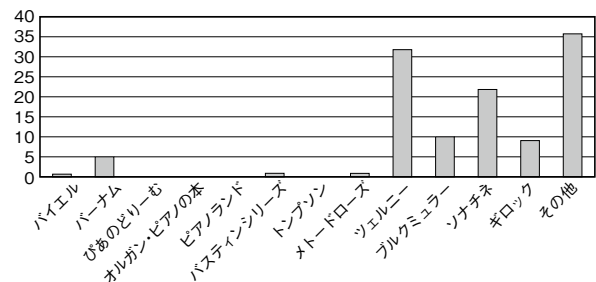


表21 大人中級その他の教材使用者数

ハノン	14
自選曲	9
バッハ	5
ポピュラー名曲集	4
大人用テキスト	2
ソナタ	1
ピアノのテクニック	1
4期のピアノ名曲集	1
ピアノの練習ABC	1
ショパンワルツ、月刊ピアノ	1

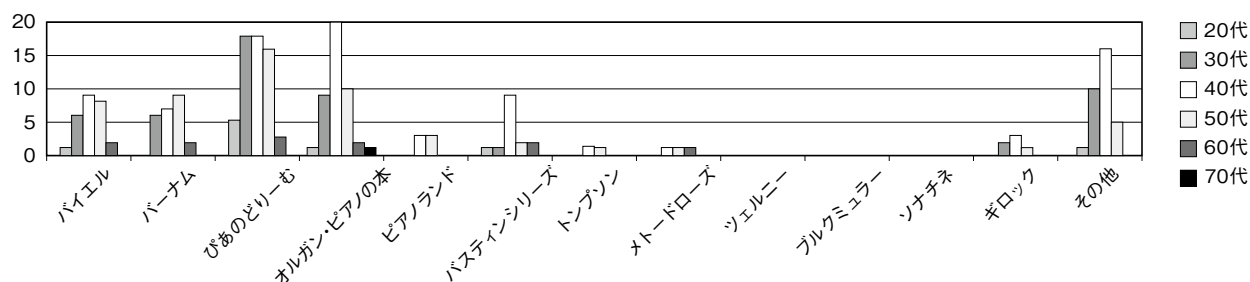
※「自選曲」とは生徒が自分で選んだ曲。

(5)【主教材・年代別】について

主教材を年代別に見ると、子ども初級レベルにおいて40歳代のレスナーが『バスティン』を選んでいいる。『バスティン』は1989年に日本語版の初版がされ、現在40歳代のレスナーが大学を卒業して講師になり始めた頃と重なる。『トンプソン』(1972年日本語版初版)や『メトードローズ』(1951年日本語版初

版)はさらに古い教材のため、20歳代、30歳代のレスナーは全く使用していない。バイエルに代わる教材として一時期はブームを巻き起こした『メトードローズ』であったが、現在では影を潜める結果となった。

表22 主教材年代別数



3. 『バイエルピアノ教則本』について

(1) アンケート結果

『バイエル』を使用していると回答したのは全体の53%を占めた。使用している理由、または利点として、「読譜のための基本的な理論がすべて盛り込まれているため」「メロディと伴奏がはっきりと分かる曲なので弾きやすく、譜読みが早くできるようになる」「和音の弾き方、指の力のつけ方、様々な音形を弾くテクニックなどを、1冊の楽譜で習得できる」「内容が深い」「反復練習により根気強さと集中力が養われる」などの意見が挙げられた。一方バイエルを使用していない、または途中で使用をやめたと回答したのは全体の46%を占め、その理由としては、「面白くないと感じる子どもが多い」「曲にタイトルがなく全て番号で書かれているため、イメージが湧きにくく機械的な演奏になる」「内容が固い」「途中で急に難しくなるため、練習するのを嫌がる」などが挙げられた。

(2) 『バイエル』について

「“バイエル”って何だと思う?」と、学生に聞かけると、「本の名前!」という答えが多く返ってくる。このように、『バイエル』をピアノ教則本の名前だと思っている人が多いようだが、実はドイツ生まれの作曲家の名前である。バイエルが44歳の時

に出版された『バイエル』は、世界中で愛用され、日本に於いても、子どものための、また大人の初心者のためのピアノ教則本として、140年近くも長く愛され続けている。そして今や教則本の名称としてだけにとどまらず、ピアノ学習者のレベルを測る“ものさし”にもなっている。他の曲集には、「バイエル程度で弾ける」とか、「バイエル〇〇番程度」とうたっている物も多い。しかしながら、1980年代の終わり頃から『バイエル』が批判されるようになり、ピアノ教師たちが口をそろえて「私は『バイエル』を使いません。」と誇らしげに言うまでになってしまった。戦後には、海外から、特にアメリカから新しい教材がたくさん入ってきて、それらの要素を融合し、さらに日本の歌や『バイエル』の伝統などの要素を加え、特に平成になってから日本の作曲家やピアノ教師によって数多くの日本のピアノ教本が続々と出版されるようになった。それでも、未だに教育現場や、保育士採用試験、教員採用試験などで『バイエル』が用いられているのが現実である。そこで、『バイエルピアノ教則本』の内容について触れてみたい。まず、バイエルが言葉でこの世に残した唯一のメッセージであるという序文が冒頭に掲載されている。

～はじめに～

この小品は将来のピアニストができるだけやさし

い仕方ではピアノ演奏の美しい芸術に近づけることを目的としている。子ども、とりわけまだまだ可愛い子どものためのこの本は、小品に許されたページ数の範囲内でどの小さなステップでもうまくなってゆけるように作ったものである。以上のことから、ピアノ演奏で出会うあらゆる困難、例えば装飾音などについてもれなく網羅することはこの小品の目的ではありえないことを了解してほしい。実際、生徒が一年かせいぜい二年で習得できる教材を初心者に提供するための入門書を作ろうとしたに過ぎない。こうした内容の作品はおそらくこれまでになかったものである。この作品は、音楽に理解がある両親が、子どもがまだほんの幼いとき、本格的な先生につける前に、まず自分で教えるときの手引きとしても役立ててほしいものなのである。

私はこの後に中級程度の難易度まで進む詳しいピアノ教則本を出版することを考えている。

フェルディナント・バイエル¹⁾

●『バイエル』は12曲の変奏がある1番と、8曲の変奏がある2番とで始まる。

(変奏曲として記載されているものはバイエル全体でこの2曲だけである)

- これらにはすべて連弾として伴奏がついている。
- この2曲のテーマは、まるでドイツ改革派教会のコラールの1節のように聞こえる。

●しかしながら、『バイエル』の前半はほとんどが1番と2番のテーマの変奏曲でできている。

- 1番のテーマによる変奏曲
1, 10, 12, 13, 14, 15, 23, 24, 27, 30, 31, 34, 35, 36, 37, 47, 54, 55
- 2番のテーマによる変奏曲
2, 8, 9, 11, 16, 17, 18, 19, 21, 21, 22, 25, 26, 29, 33, 40, 41, 42, 43, 48, 50, 52, 57, 58, 59, 60, 61, 63, 64
- したがって、1番と2番の伴奏(連弾で受け持つセカンドパート)は、そのまま前半の独奏曲の伴奏に使うことができる。

●カリキュラム、曲の構成、テクニックなどの特徴について

譜読みの導入としての特徴としては、ト音記号1

段譜で高いCポジションから始まる。

- 1番 ト音記号1段譜、右手だけ、Cポジションスラーの説明
- 2番 ト音記号1段譜、左手だけ、GポジションすでにG durト長調が導入されるが、調号Fis ファ#はまだ記されない。
反復記号の説明
- 3番 大譜表(上下ともト音記号)の導入、両手奏、ユニゾン
- 8番 右手メロディ、左手伴奏の形の両手奏
- 11番 並行進行
12番から31番までの20曲は、左右両手とも5度の固定位置での両手練習。
- 17番 左手の2声的進行で旋律と合わせて3和音のハーモニーが形成される
- 18番 左手に和音
- 19番 ポルタート
- 29番 タイ
- 41番 a moll イ短調
- 44番 全音符から8分音符に至るまでの音価を正しく区別して弾くための練習
伴奏付き
- 45番 8分音符の導入
- 48番 付点4分音符の導入
- 52番 8分の6拍子
- 53番 アウフタクト、f
- 54番 ここで初めてヘ音記号の導入
- 55番 左手にアルベルティバス、mf
- 57番 p、エコー効果
- 58番 クレッシェンド、デクレッシェンド、ディミヌエンド
- 59番 8分の3拍子
- 65番 C dur ハ調 長音階
- 70番 G durト調 長音階、ここから調号が出てくる。
- 73番 臨時記号
- 75番 D dur ニ調 長音階
- 79番 A dur イ調 長音階
- 80番 前打音
- 82番 E dur ホ調 長音階

- 85番 F dur ヘ長調
- 86番 全音符から16分音符までの音階練習伴奏付き
- 91番 a moll イ調 短音階
- 94番 F dur ヘ調 長音階
- 99番 B dur 変口長調
- 105番 半音階

●『バイエル』の番号付きの曲は、全106曲からなる。カントルや教会オルガニストの仕事は日曜日の礼拝を中心に週単位で進んでいく。

106という数字はカントルや教会オルガニストの活動単位である週（教会歴）に関係していると考えられる。1年365日は52週と1日。1日を切り上げて53週とすると、106曲は週に1曲ずつ仕上げていくとちょうど2年で、週に2曲ずつ仕上げていけばちょうど1年で修了する。『バイエル』の番号106は母親とのおけいこの日々の隠された暗号となっている。

1年でピアノ演奏の基礎技術を習得しなければならない学生にとってもうってつけの教本であるといえる。

4. 『バーナム』について

(1) アンケート結果

『バーナム』は併用教材として、子ども初級、子ども中級、大人初級、大人中級の全てのレベルにおいて使われている。特に初級レベルが多い。そして使用している講師の年齢は20代～50代と幅広い。その理由としては、「1曲が短いのでその場で理解させることができ、達成感がある」「1曲1曲に題名がついていて弾き方が想像しやすく、練習の狙いがわかりやすい」「読譜力がつき、弾きやすい」等であった。

日本では『バーナム・ピアノテクニク』シリーズと『バーナム・ピアノ教本』シリーズが翻訳されている。しかしアンケートの意見から、ほとんどの講師がバーナム・ピアノテクニクを併用教材として使用していると考えられる。

(2) 『バーナム・ピアノテクニク』について

このシリーズは、幼児のための“ミニブック”、“導入書”と1～4巻までの全6巻からできており、解説には、「子供の音楽性を豊かにすることに重点をおいてかかれたテクニクの本です。この本によって子どもたちは、柔軟性のある指をつくりながら、同時にピアノの基本的なテクニクを習得することができるのです。」²⁾(解説者 中村 菊子)と述べられており、子どものためのテクニク教材と位置づけることができる。

作曲したエドナ メイ バーナムは、幼少の時に母親からピアノの手ほどきを受け、後にはピアノ、作曲、幼児教育と多面的な勉強をした作曲家である。子どものピアノ教育に専心し米国ウィリス出版社より41冊のピアノの本と69の小曲を出版している。

監修者のことばに「指の練習は多くの場合、分別のない子供にとって意味が分からないまま、無味乾燥なものとして受けとられがちです。指の練習といってもその本質は「音楽的心情」と結びついて、心を表現する能力とつながらないと意味がありません。子どもは、自分から想像するものを感じるものを表現しようとするときには努力を惜しみませんが、興味のないものには、強制すればする程嫌悪感を増すのが普通です。」とある。そしてこの本について「子供達が自然に技術の勉強ができるよう、在来のテクニクの勉強に対する抵抗感をなくしています。」²⁾(バーナム・ピアノテクニク監修者のことば 大島 正泰)と記している。

アメリカや日本でも、この本が子ども達に大変親しまれているのは、幼児教育で子どもの心情や発達を学んだバーナムが作曲したからだと考えられる。

このシリーズは各巻とも5つのグループに分かれており、各グループごとに1曲が4小節から16小節程度の短い練習曲が12曲入っている。どの練習曲にも一つ一つに、運動の題名と、棒人形のようなイラストがつけられている。

スケール、アルペジオ、和音、オクターブ、半音階、装飾音、トリル等、大切なテクニクが繰り返し各グループに出てきており、学習の初期から様々な種類のテクニクをシンプルな音でわかりやすく

学ぶことができる。

スタッカート（一音一音短く切る）の練習は、ピアノを習い始める年齢によって始める本にもばらつきはあるが、どの本から始めてもグループ1の最初のほうに出てくる。「ジャンプしよう」「つま先でかけ足」「はずむ手まり」等の表題がついていて、軽く飛び跳ねる感覚で無理なく弾ける。1巻が終わる頃には、両手でいくつかの音を速いテンポで弾かせている。

（「導入書グループ2 1 背のび」(楽譜1)「導入書グループ4 11 はずむ手まり」(楽譜2)）

グループ2

1 背のび



楽譜1 「背のび」

11 はずむ手まり



楽譜2 「はずむ手まり」

和音の練習については「深呼吸」と表題がある。音を二音以上弾くとき指が鍵盤の深くまで押しているかを感じながら弾くことができる。ピアノ初心者にとって三音を同時に弾くことは容易ではない。しかし「導入書グループ4 1 深呼吸」(楽譜3)では和音構成音を理解させて簡単に弾かせることができる。そして間もなく色々な種類の和音が出てきて、響きの違いを感じるように進めている。

その他、「側転運動」と表題をつけてのアルペジオ（分散和音）の練習、「歩こう、走ろう」と表題をつけてのスケール（音階）の練習、「つま先もぞもぞ」と表題をつけての半音階の練習がある。

ミニブックから4巻までの全てのグループの最後に「元気いっぱいさあ弾こう」という曲が必ず用意されている。どの曲も8小節の同じような短いフレーズだが、グループが進むにつれて和音がついたり、音符が細かくなったり、スタッカートで弾かせたりと徐々にレベルを上げていく。曲に一貫性があるためリズムの違い等も分かりやすい。また、メロディーを滑らかに歌って弾けるようにすることも容易にできるように作られている。（「導入書グループ4 12 元気いっぱいさあ弾こう」「1巻グループ5 12 元気いっぱいさあ弾こう」(楽譜4)）どのテク

グループ4

1 深呼吸



楽譜3 「深呼吸」

12 元気いっぱい さあひこう



楽譜4 「元気いっぱいさあ弾こう」

ニックも簡単に弾けるため進度も早く、1巻が終わる頃には何度も同じようなテクニックを繰り返し弾いているので読譜力もつく。そして4巻が終わる頃にはモーツァルトやショパン等にも通じるテクニックがつくように進められている。

以上のことから、このシリーズは曲を弾くために必要な多様なテクニックを一つ一つ最小の単位にしてやさしく具体的に学ぶテクニック本であり、「音楽的心情」も育むテクニック本であると評価する。しかしながら、ある程度ピアノが弾けるようになり持久力が必要になってきた時はどうだろうか。アンケート結果にも、『ハノン』や『ツェルニー』に入るまでの併用教材として使用」という回答もあった。

(3) 『バイエル』と『バーナム』との比較

『バイエル』にも様々なテクニックが出てくる。しかし初期の段階では音に慣れて滑らかに指を動かす曲がほとんどのように感じる。そして和音を理解していないうちに、左手に伴奏がついてくる。特にⅠの和音（ドミソ）とⅤの和音（シレソ）が初級レベルで多く出てくるが、指を動かすだけで精一杯になり響きまで感じるのは難しいようだ。ピアノ初心者の学生が、和音の響きの違いを感じて演奏できるようになるのはかなり後になってから、という人が多く見られる。初期の段階のまだ読譜力がついてない時でも、和音だけを取り出して練習し、響きの違いを感じさせることが必要である。『バイエル』の曲が進んでいくと、スタッカートやトリルが出てくる。しかし曲が難しくなっているために軽やかに音を切って弾くことが困難になる。これもまた、このテクニックだけを取り出して練習させることにより、スムーズな演奏ができるようになる。『バイエル』は大人が短時間でピアノを弾けるようにするにはとても良い教材である。『バーナム・ピアノテクニック』は、どちらかといえば小さな子どものための教材と認識されている。しかしこの中の一つ一つのテクニックを取り入れることで、より短時間でピアノに親しみ上達するようになると考えられる。幼児教育を学んだバーナムが作曲したこのシリーズは、子どもの音楽性を豊かにすることに重点をおい

た教材だと述べてきた。学生も、子ども達にとって音楽（幼児のうた）を学ぶということはどういうことなのか、を考えながらピアノを学んで欲しい。そのためにもこの教材の曲を知ることは必要だと考える。

5. 『ブルクミュラー』について

(1) アンケート結果

『ブルクミュラー』は、主教材として子ども中級、大人中級、そして併用教材としても多くの方が使用していることがわかった。人気の曲が多いので楽しい。子どもが弾くのに曲想や和音が複雑でないなど適している。とても素敵な曲も多く生徒さんも喜んで練習できる。聞き覚えがある曲も多くなじみやすい。ちょうど良い長さである。（アンケート自由記述より）つまり『ブルクミュラー』は難易度的に高くないが、身につけた基礎を応用させるための練習楽曲であると言えるだろう。そしてさらに知識を深め音楽的に自立するのに適した曲集だと言える³⁾。さほど複雑な和音は使用されてなく、二部形式や三部形式がほとんどであるため全体の形式が把握しやすい。親しみやすい曲が多く、演奏者にも聴く側にも満足感を与えてくれるところが、この曲集の魅力的なところであろう。

『ブルクミュラー』は、とにかく生徒から「弾きたい」「この曲知っている、弾いてみたい」とリクエストの多い曲集であり「アラベスク」や「貴婦人の乗馬」は根強い人気である。弾きたいという気持ちを持てることはとても良いことである。

(2) 『ブルクミュラー』について

フリードリヒ・ヨハン・フランツ・ブルクミュラーは、1806年12月4日、ドイツのレーゲンスブルクで生まれた作曲家・ピアニストである。1832年以降にはパリを中心に活動し、ピアノの作曲家、サロン音楽家、教育者として名声を得ていた。本格的な作品としてはバレエ音楽「ラ・ペリ」があるが、ピアノ教育用の小品（「25の練習曲Op.100」や「18の練習曲Op.109」、「12の練習曲Op.105」）で知られる。

『25の練習曲Op.100』はピアノ学習者の教則本として愛好者の多い定番の練習楽曲。1851年（45歳）

ブノワ・エネ社より出版。

『12の練習曲Op.105』はブルクミュラーによるピアノ練習曲の中で最も難易度の高い作品である。1854年（48歳）ショット社より出版。D. F. E. オベール（1782年-1871年。作曲家・パリ音楽院の院長）に捧げる。

『18の練習曲Op.109』はロマン的な曲想で若干難易度が高めのピアノ練習曲。1858年（52歳）ブノワ・エネ社とショット社で出版。ステファン・ヘラー（1813年-1888年。作曲家）に捧げる。1860年代はパリ郊外のエソンヌ県のマロール=ザン=ユーロポア村で隠遁生活を送り、1874年2月13日、67歳でこの世を去る。ブルクミュラーは一説によると、目立つことを苦手とし、控えめな人物だったと言われている。時代の背景としては、バイエル（1806年-1863年）、メンデルスゾーン（1809年-1847年）、ショパン（1810年-1849年）、シューマン（1810年-1856年）、リスト（1811年-1886年）など、ピアノ音楽の大作作曲家たちの活躍と同時期であり、ピアノ音楽がもっとも活発に作曲されていた時期となる。日本で初めてブルクミュラーのピアノ曲が弾かれたのは、明治22年（1889年）長崎県の活水女学校のカリキュラムに入っていたことがわかっている。

ウィーン原典版、はじめにによると『25の練習曲Op.100はその当時としては稀に見る、ピアノ教育法についての深い洞察力を示したものである。この練習楽曲が生徒に要求している多くの課題を解決することが、後の高い段階のために重要な意味を持っている。生徒の進歩のために必要なすべての基本的課題が注意深くしかも計画的に織り込まれている。さらに、ある曲で新しく習得したことが次のいくつかの曲で繰り返されることによって、そのことをよく分からせるようにできている。このようにして生徒が最初に通常の教則本で、場合によっては、習い落したことによる遅れをだんだん取り戻すことができる。ここで特に指摘しておきたいのは、徐々に音域の広がってゆく楽譜を自力で習得する能力、イタリア語による強弱と表現に関する指示を実現すること、音楽一般に用いられる基本的な小曲様式を知る、次第に難しくなる演奏技術の訓練、理解したこ

とを演奏しながら聞いて体験する音と結びつけること、さらに音楽的芸術的な表現の多様性などである。

この練習楽曲集を観察すると、ブルクミュラーが明確な教育方針を多種多様な作曲の能力と巧みに結合できたことがわかる⁴⁾』と記されている。初版では25曲すべてにフランス語による短いタイトルが付けられている。そのタイトルをどのように日本語に翻訳するかは出版社・校訂者の考え、言葉の選び方によって変わる。また、ブルクミュラーは、サロンの令嬢達のピアノ指導も行っていたためか、どこか女性的なタイトルが多い。

第1曲 すなおな心 La Candeur ハ長調

ポイント：レガート奏法

第2曲 アラベスク L' Arabesque イ短調

ポイント：和音のスタッカート、16分音符の粒をそろえる

第3曲 牧歌 La pastoral ト長調

ポイント：メロディーをなめらかに歌う

第4曲 小さな集会 La petite Reunion ハ長調

ポイント：3度と6度の重音

第5曲 無邪気 Innocence ヘ長調

ポイント：柔らかい16分音符、レガート奏法、表情のある和音

第6曲 進歩 Progres ハ長調

ポイント：音階、10度のユニゾン、アーティキュレーション

第7曲 清らかな流れ Le Courant limpide ト長調

ポイント：内声のメロディー、1の指のレガート

第8曲 優美 La Gracieuse ヘ長調

ポイント：32分音符のターン

第9曲 狩 La hasse ハ長調

ポイント：ロンド形式、重音のバランス、転回形、跳躍

第10曲 やさしい花 Tendre Fleur ニ長調

ポイント：短いスラーと長いスラーの弾きわけ

第11曲 せきれい La Bergeronnette ハ長調

ポイント：分散奏、3度のレガート

第12曲 別れ L' adieu イ短調

ポイント：3連符、平行調

第13曲 なぐさめ Consolation ハ長調

ポイント：声部を弾きわけ、1の指の脱力

第14曲 スティリエンヌ La Styrienne ト長調

ポイント：ワルツ、装飾音、跳躍

第15曲 バラード Ballade ハ短調。

ポイント：物語の場面を弾きわけ、同主調

第16曲 あまいなげき Douce Plainte ト短調

ポイント：メロディーを歌う、左右の対話

第17曲 おしゃべり La Babilarde ヘ長調

ポイント：同音連打

第18曲 気がかり Inquietude ホ短調

ポイント：16分音符、和声感、拍頭の休符

第19曲 アヴェ・マリア Ave Maria イ長調

ポイント：4声を弾きわけ

第20曲 タランテラ La tarentelle ニ短調

ポイント：舞曲のリズム

第21曲 天使のハーモニー L' Harmonie des
Anges ト長調

ポイント：レガート奏法、分散和音、左右の受け
渡し

第22曲 舟歌 Barcarolle 変イ長調

ポイント：舟歌のリズム、左右の会話

第23曲 帰り道 Le Retour 変ホ長調

ポイント：和音のスタッカート、スタッカートの連打

第24曲 つばめ L' Hirondelle ト長調

ポイント：腕の交差、速い移動

第25曲 貴婦人の乗馬 La Chevaleresque ハ長調

ポイント：重音のバランス、ユニゾンの音階

(3) 『バイエル』と『ブルクミュラー』の比較

『ブルクミュラー』は単に音を並べて弾くだけでなく、技術的に『バイエル』(後半)と大差はない。ただ要求されるレベルが高くなる。

『バイエル』との違いとして一つ目は曲にタイトルがついている。バイエルでは「○番」のように曲に番号しかついていないが、ブルクミュラーでは「すなおな心」や「貴婦人の乗馬」のように、全曲にタイトルがついている。

一般的にポップスなど現代の音楽には曲にタイトルがついているのが当然と思われているが、クラシック音楽ではタイトルがない曲は珍しくない。

『バイエル』を始め、主に練習を目的とした曲にタイトルがないものも多いが、モーツァルトやベートーヴェンなどの有名な曲でもタイトルがないものは数多く存在し、古典派に属する曲の多くはタイトルがない。「『バイエル』は題名がないためイメージしにくい」とアンケート自由記述にもあるように、曲のタイトルは演奏者にとって大事なのであろう。

『ブルクミュラー』は古典派でありながらロマン派である。主要三和音や音階をしっかり学ぶことができるということは古典派であるが、想像力を刺激する言葉=タイトルがついているというところ、そしてそのタイトルが、人間の心理的・内面的な世界を表していたりするところはとてもロマン派的である³⁾。ロマン派は感情的で文学的、詩的な時代だからタイトルが多くなるのは当然であり、『ブルクミュラー』はかなり意識的にタイトルをつけて、曲の持つイメージを演奏者に捉えやすいようにしたと考えられる。

二つ目は曲想用語 (mormorand: ささやくように、つぶやくように。religioso: が敬虔に、神仏を敬う気持ちで。armonioso: よく調和して。など) が豊富なところである。曲のタイトルだけでなく、速度標語、そして曲想用語も細かく書き込まれているところは、演奏者にとってさらにイメージしやすくなり、表情豊かな演奏に近づくことができる。

『25の練習曲Op.100』は、ピアノのテクニックを練習するためだけの曲集ではなく、その曲を聴いて楽しむこともできる。ピアノで弾く際にも、楽譜通りに弾くだけでなく、その曲の音楽性を理解し、その曲にあった弾き方や音作りが求められる。音楽のフレーズを読み取って、メロディーを美しく歌うように弾くこと、曲のタイトルや曲想用語からイメージを膨らませて音楽作りをしていくことが大切であり、創造力・想像力も伸ばすことができる作品である。学生にとってもシンプルな曲想、わかりやすい構成感であるため、イメージ作りのトレーニングになるだろう。この曲集を学ぶことにより自分の心で感じ、自分で考え、自分を表現する方法や想像力を身につけてほしい。それは保育の世界でも大いに活かすことができるだろう。

6. 『ぴあのどリーむ』『オルガン・ピアノの本』について

(1) アンケート結果

子どもの小学生初級で、現在最も使用されている人気の教本である。

アンケートの結果では、主教材として導入と初級のテキストで、『ぴあのどリーむ』は約50%、『オルガン・ピアノの本』は約35%使用されている。指導者の年代は、20代～60代に渡って、多くの年代で使われている。その理由としては、『ぴあのどリーむ』、『オルガン・ピアノの本』は初めから大譜表で、ト音記号とヘ音記号を同時に学べ、ヘ音記号も抵抗なく覚えていける。音符も大きく絵も可愛いので、子どもたちが喜ぶ。親しみやすい曲が多く、1曲ずつに題名が付いていて曲と合っているため、小さい子どもにとっても曲のイメージを持って演奏しやすい、等が挙げられる。

(2) 『ぴあのどリーむ』について

1993年に田丸信明により出版された。曲の全てにタイトルが付いている。また永田萌によるカラーの鮮やかなイラストがあり、妖精やお花などのモチーフが使われ、夢やファンタジーに溢れている。絵を見ながら、自由に想像力を広げていくことができる⁶⁾。

曲のイメージがつけやすく演奏しやすい。『バイエル』の要素を受け継ぎながら、子どもに耳なじんだ歌を取り入れ、無理なく緩やかにそして、反復を多くすることで着実に基礎を身につける⁶⁾。

導入より大譜表を使用して、真ん中のドを中心に音域を広げていく。両手で同じ方向に弾くので左右の指遣いは反対になる。最初からヘ音記号が取り入れられているので、ト音記号とヘ音記号両方に慣れることができる。その後、3巻からハ長調のポジションに発展していき、4巻後半からト長調ポジションに入る。音符も大きくとても読みやすい。2巻の初めまでは歌詞付きで、田丸信明オリジナル曲が多く、一部伴奏も載っている。その他知っている色んな国の民謡や、モーツァルト、ベートーヴェン、ツェルニーなどの曲もある。各巻にカリキュラムポイントと、指導ポイントが付いている。

指遣いに関しては順序立てて、指ちぢめ、指ひろ

げ、指かえ、指くぐり、が出てくる。

幼児から小学生対象の教本。幼児版と1巻～6巻からなる。併用教本としてのワークブックや、曲集レパートリーがある。2～3歳の子どもには幼児版から入ると分かりやすい。幼児は1巻から始められる。

新しい調性が出て来ると、音階練習、カデンツァ練習があり、和声感、調性感が育つように工夫されている。

調性：長調は $\sharp 3$ つ、 $\flat 2$ つまで。短調はイ短調のみ

和音：I IV V $_7$ 新しい調に入る時は、鍵盤図で説明があり音階とカデンツ練習を丁寧に入れている。

(3) 『オルガン・ピアノの本』について

1957年ヤマハ音楽教室の最初のテキストとして作られた。当時の主な教育楽器はオルガンとピアノであったため、このタイトルで長く使われている⁷⁾。

最初から大譜表を用いて真ん中のドから少しずつ上下に音域を広げていく学習の進め方で、当時としては画期的であった⁵⁾。左右対称のため同じ指で弾くことになり、まだ左右の認識が弱い幼児にも分かりやすく弾きやすい。その後、ハ長調のポジションに発展していく。ハ長調ポジションでは、右手1の指を中央のド、左手の5の指を1オクターブ低いドに乗せてドレミファソを弾く。

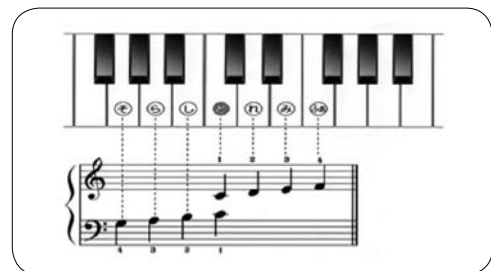


図2 真ん中のドのポジション⁷⁾

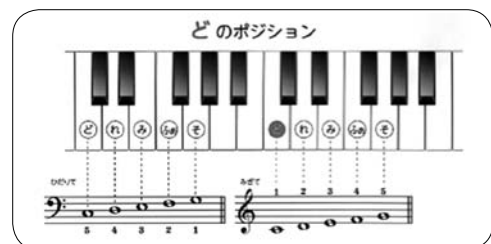


図3 ハ長調ポジション⁷⁾

導入に子どもの生活に密着した歌を取り入れ、子どもが興味を持ちやすい。『バイエル』や『メトロドローズ』、『ツェルニー』、『ブルクミュラー』の曲、日本の童謡や各国の民謡、さらにオーケストラ曲の編曲や連弾もある⁶⁾。さまざまな教本の長所を取り入れている。

ポジション移動が1巻のうちに、Cポジションから、F、A、D、Gポジションまで進んでいる。全ての曲にタイトルが付いている。

2015年に出た新版は、挿絵を一新し想像力を広げている。現代のレッスンに合わせて、バロック期の2声の曲、古典、ロマン、近現代などの4期を取り入れ、より幅広い表現方法を学べるように、現代の子ども達に合った視点でリニューアルされている⁶⁾。レベルの上昇をよりなめらかにする、指遣いの見直しなど、内容に色々手が加えられている⁵⁾。曲ごとに何を学ぶのか、そのポイントを明確に表示して、楽語の説明もある。子ども達にはとても分かりやすく、曲も想像して弾きやすい。

新しい曲に入る前の基礎練習曲に、スケール・カデンツも加え、テクニク的な要素や、和声感や調性感も強化している。二声やポリフォニーの曲もある。

全4巻で、併用教材としてのワークブックがある。次々に新しいポジションへ進み、進度が速いので、小学生からのスタートには向いている。

調性：長調は#3つ、b3つまで 短調は#1つ、b2つまで

和音：I IV V₇ 新しい音が出てくる前には鍵盤図で学ぶ。

(4)『バイエル』と『ぴあのどリーむ』『オルガン・ピアノの本』との比較

『バイエル』はテクニク取得のため避けては通れない教材で、理論的に進んでいるので、中学生以上の生徒には最適だと思われる。保育士や幼稚園教諭の試験に『バイエル』の課題もあるところがある。ただ子どもの教材としては、挿絵も無くタイトルも付いてないのでイメージが湧きにくい。練習曲的な要素が多く子どもは嫌がる。現代の子ども達は楽しく短い曲で、音符も読みやすく、すぐに弾ける

曲に人気がある。

『バイエル』の最初は5指ポジションからト音記号ばかりで、右手だけ、左手だけの部分を経てから両手に移行する。両手ユニゾンになってもト音記号が続き、後でヘ音記号が入ってくる。両手奏になってからは、右手がメロディー、左手が伴奏のものが大半を占める。リズムは順序立てて細かいリズムが出てきて、後半はかなり難しくなるので、その後『ブルクミュラー』や、『ソナチネ』に入りやすい。童謡の曲もほとんど弾けるようになる。調性は#4つ、b2つまで。短調はイ短調のみ。

学生は、短い期間で『バイエル』を終わらせるのに四苦八苦している。ハ長調からすぐに他の調に移動する前に、童謡など知っている曲でハ長調の曲を沢山弾けたら譜読みに慣れるのではないかと思う。園児の音域は、ハ長調の音域が歌いやすい。ピアノの学習をすることで、音楽教育の本質である豊かな感性、表現力、想像力を身に付けて、保育、幼児教育の現場に役立てて欲しいと切に願う。

7.『ツェルニー』と『ハノン』について

(1) アンケート結果

『ツェルニー』は、主教材と併用教材の子ども中級、大人初級、大人中級と、幅広い層に使用されている。『ハノン』もまた主教材と併用教材共に、子ども初級から大人中級まですべての段階で使用されている。これらのことからテクニクを身に付けることや指を強化することがいかに重要視されているか、ということが見てとれる。

(2)『ツェルニー』について

『ツェルニー』の練習曲は、作品番号によって難易度もさまざまである。その特徴は、どの練習曲集も最初の方は弾きやすいものから始まり、その曲集の終わり頃、すなわち後半に進むほど難しくなっていく。アンケート調査結果でも『ツェルニー』について「テクニクが身につく。レベルが上がると難しい。」との意見があった。また、ほとんどの曲が右手に音楽的なメロディーがあり、左手は徹底した伴奏の形で作られていて、それぞれの役割が明確で

ある。左手は、バスを保持したまま内声を弾く奏法がよく出てくることが特徴として挙げられる。ツェルニーが作曲した練習曲集は多数存在するため、ここでは『バイエル』と並んだ、あるいは終了した程度の曲集の『第1課程練習曲』(作品599)『リトルピアニスト』(作品823)『100番練習曲』(作品139)の3つに絞る。『第1課程練習曲』(作品599)については、『バイエル』と同程度で基礎をしっかりと学ぶことが出来る。目次にあるように、練習目的が提示されており理解しやすい。初心者が両手で奏することにある程度慣れてきた頃から順次進めていくと効果的に学べる。ハ長調以外の曲は、調号が少ない調での練習で読譜の負担が少ない。メロディーは比較的覚えやすい。次の段階の『リトルピアニスト』(作品823)については、『第1課程練習曲』と比較するとより高度になっている。『第1課程練習曲』同様、練習目的は明確なのだが、指のための技巧的な練習に加えて、音楽的に演奏することを重視した曲が増えている。それには曲の特徴をつかんで音楽に適した音色を出すことが重要なのだが、その音色を出すためのふさわしい指のタッチや手首の使い方、脱力など、音楽を表現するための技術を見つけ出していく練習にもなる。『バイエル』中程度あるいは終了した程度で、読譜が難なく出来るようになった頃、『バイエル』の次の練習曲集としても使用出来る。出版社によっては、12の長音階と短音階の練習、楽典が記載されているものもある。この音階にカデンツはなく、短調は旋律短音階となっている。『100番練習曲』(作品139)については、『バイエル』を終了した程度で、『ツェルニー30番』に入る前の準備としても使われる。前に挙げた2曲集と比較すると、技巧的なテクニックと音楽的表現、共に難易度がさらに上がっている。前に挙げた2曲集でテクニックと音楽的表現のそれぞれを学べたならば、『100番練習曲』ではこの2つの要素を1度に上手に奏することを要求される。それは、1曲の中にテクニックと表現が1度に学べる要素が入っている点からも見てとれるので、次々進めば両方が身に付いていく。さまざまなテクニックのパターンが入っている曲を多くこなすと、自分がどのパッセージが苦手なのか気

付くことも出来るであろう。

『ツェルニー』で学べることは楽譜上で見るだけでも、音階、半音階、3度、6度、3連符、同音連打、付点のリズム、前打音、装飾音、トリル、スタッカート、アーティキュレーション、レガート、ノンレガート、アウフタクト、分散和音、休符、臨時記号等がある。

『ツェルニー』におけるテクニックの習得とは、これらの奏法を正確に弾くこと、指が動くようになることもさることながら、さらにこれを良い音で奏するための指、手首、腕等の上手な使い方も並行して学び、フレーズや音型、音色を考えて曲に表情を付けていくことである。1度にこれだけの要素が学べるということは、練習曲という枠を超えた音楽として捉えることが出来るであろう。アンケート調査結果にも「『ツェルニー』は単調で永遠に続く練習曲のイメージがあるが、コンクールや試験を受けるには必須で、一曲一曲楽譜の要求していることをきちんと弾くと、曲としても面白いと思う。」との記述があった。『ツェルニー』は本格的に音楽性のある演奏を学んでいく過程の中でちょうど入口となるような役割を担っているのではないだろうか。

『ツェルニー』の練習曲集は多数あり曲数も多いことから、すべてをこなそうとするとかなりの時間と労力を費やす。そこで各練習曲集から効率よく、演奏技術向上に必要とされる曲を抜粋した曲集が出版されている。『こどものツェルニー』では曲名が付けられている。『はじめてのツェルニー・ピアノ・スクール ツェルニー30番のまえに』では各練習目的が明確で解説も譜面付きでわかりやすい。『ツェルニー練習曲 ツェルニー30番の前に』では前打音や3度などの練習目的が同じ曲が数曲立て続けに並べてある。効率よく学べるような曲順になっている。『こどものツェルニー100番 効果的な24曲でしっかり身につくテクニック』では練習目的が明確で、あらゆるテクニックを網羅することが出来る。

(3)『ハノン』について

『ハノン』は、『ツェルニー』と同様に良い演奏をするためのテクニックを身に付けることを目的

に用いられる。しかしながら、『ハノン』の内容は『ツェルニー』とは異なり、練習目的と練習方法も独特である。ここでは、『ハノン』から習得出来るテクニックを挙げていくこととする。まず、音を出す際の基本となることから触れていくと、指1本1本が自由自在にしなやかに動くようにすることが挙げられる。次に、指や手首の正しい形を習得することが挙げられる。具体的には指が鍵盤に対して立つようにし、手首は振らずなるべく固定したままで音が出せるようにする。また、全部の指に均等な力が加わるようにし、音色の粒が揃って聴こえるようにする。なおかつ、その加わった指の力に対して指先が軟弱にならないようにしっかりと耐えるための指の支えを強化する。特に動かすことが困難な4の指を安定させて動かせるよう強化していく。その他には、曲の最後まで腕が疲れることなく、無駄な力を省いて演奏出来るようにする。右手と左手で指や腕の使い方に差が出ないように注意しながら練習する。さらに、さまざまな音型に対して基本となる正しい運指の習得がある。テンポやリズムについては、同じ音型が連なる反復練習において、曲のテンポが揺れないように安定した拍感を身に付けていくことが重要である。さらに、リズムが滑らず転ばず、正しいリズムが奏せているかを聴き分ける耳を育てていくことも重要である。これらの事が難くこなせるようになれば演奏上の幅が広がり、さらに、応用が利くことに繋がる。

『ハノン』の反復練習は、音型はさまざまであっても基本は上行と下行で出来ているためパターンをつかみやすい。その後は速度を上げていく練習や楽譜に掲載されているリズム練習へと移っていき、さらにテクニックを強化することが出来る。このリズム練習はバラエティーに富んでおり、これらは演奏上に出てくるどんなリズムやアーティキュレーションにも対応できるように適格なリズム感を養うことやしなやかな手首の使い方を学ぶことにも繋がる。39番の音階と41番のアルペジオでは、3から1の指、あるいは4から1の指、その反対の1から3の指、1から4の指、それぞれの動かし方が非常に重要である。これらの指をスムーズに動かすために

は、指と手首の柔軟性を付けてなるべく肘は使わないようにする。アルペジオの場合も同様であるが、新たに指の間を広げることも重要となる。特に音階はさまざまな曲に出てくるためこの運指の習得は重要である。また、調性やカデンツを知り、短調においては和声短音階、旋律短音階が学べる。

『ハノン』の反復練習は1曲あたり反復する数が多く、1曲が長い。さらにリズム練習も加わればかなり長くなり、もともと筋力がまだ十分に備わっていない生徒には難しい。また、音の数も多く、音階に至っては調号がどんどん増えていくことや、ある程度の速度、リズム練習に伴うリズム感も必要で初心者には難易度が高い。アンケート調査結果でも「『バーナム』は『ハノン』がまだ無理な生徒に使う。」との意見があった。『こどものハノン』や『新こどものハノン “しなやかで強い手” を育てる魔法の5分間練習』では、反復練習が手や腕の負担が少ない1オクターヴ分の音域になっており初心者や子どもでも取り組みやすくなっている。『ハノン』は徹底した指や手首のトレーニングが目的の教材なので、音楽性を身に付けるには『ハノン』とキャラクターの全く異なる教材との組み合わせが必要である。

(4) 『バイエル』と『ツェルニー』(《第1課程練習曲》 《リトルピアニスト》《100番練習曲》)の比較

『バイエル』と『ツェルニー』の共通している点は、両手で奏する場合、両手ともト音記号の大譜表から入り、その後左手がヘ音記号の大譜表へと移っていく。各曲はさほど長くなく、次々進められる。右手にメロディー、左手に伴奏の形も共通している。左手のバスを保持したまま内声を弾く奏法が『ツェルニー』に頻繁に出てくるのだが、『バイエル』にも78、88、91、97、100、102、104、105番に同様の奏法が出てくる。『バイエル』も『ツェルニー』も左手の5の指を強化することに重点を置いていたことが見てとれる。異なる点は、『バイエル』は片手の練習を行ってから両手に移っていくが、『ツェルニー』は最初から両手で奏する。『ツェルニー』は曲集の始めの段階から、右手の音域が高くなることもあるため、加線を使った音符が出てく

る。これらは読譜力がついていないと難しい。『バイエル』では32番で加線の音符が出てくる。それまでは加線のない音符を比較的ゆっくり慣れていくことが出来る。『バイエル』のヘ音記号については51番の前に簡単な解説があるのだが、初めてヘ音記号が出てくるのは54番である。始めは両手ともト音記号の大譜表が、左手部分が途中からヘ音記号に変わる形で出てくる。55番から60番までも同様で、ヘ音記号に徐々に慣れていくことが出来る。その後曲頭からヘ音記号が出てくるのは61番である。『ツェルニー』にはヘ音記号の予備練習はなく、ト音記号の大譜表から急に左手がヘ音記号の大譜表へと変わる。

(5) 『バイエル』と『ハノン』の比較

『バイエル』には『ハノン』のような反復練習はない。そこで両方に出てくる音階で比較してみる。『ハノン』には長音階、短音階共に4オクターヴ分の音階がある。『バイエル』に出てくる音階にも長音階と短音階があるが、1オクターヴ分で短く弾きやすい。『ハノン』のようにテクニックを身に付けるというよりは、それぞれの調の音階を知り、調号をつけて正しく奏することを学ぶ。これらの調の音階の曲の後には、同じ調性の曲に進める様になっていて関連性があり、調性をつかみやすくなっている。さらに、3から1の指、あるいは1から3の指等の運指を守って正しく奏することを学べるようになっている。ハ調長音階の前のみ、片手ずつの予備練習が付いている。『バイエル』の半音階では片手ずつの練習を行ってから両手に入る。『ハノン』では短3度や長6度等、より高度な練習となる。『バイエル』の付録にはさまざまな音型から成る練習曲がある。まず片手ずつの練習から入り両手の練習と移行していく。一見すると『ハノン』の指の強化のための反復練習と類似しているようにも見えるのだが、ここでの練習目的は運指法となっている。生徒が今後、運指が記入されていない曲に直面した時、適切な運指を自分自身で考え、指番号を付けられるようになっていけば、演奏のミスも減り余裕が生まれることと思われる。

8. 『ギロック』について

(1) アンケート結果

福井県内ピアノ講師を対象とした教材（楽譜）についてのアンケートの結果、表6、8、10、12に示したように、主教材として『ギロック』を使用している数は少なかった。しかし表14、16、18、20に示したように、併用教材としては子ども、大人のどちらにおいても『バーナム』、『ツェルニー』について使用している数が多いとの結果が得られた。このことから、『ギロック』は今やピアノレッスンの現場においては欠かせない曲（曲集）だと言えよう。

(2) 『ギロック』について

ギロックが本格的な音楽の勉強を始めたのは大学時代からで、それまではメロディーを記憶してハーモニーを探りながらピアノに向かう生活であったらしい。大学では美術を専攻しながら作曲家の教授のもとで学び、収入を得るため子どもでも弾けるような短い曲を少しずつ書くようになったようだ。それらの曲の中にはギロックが育ったアメリカ、ミズーリ州の田舎町の自然の中でのびのびと遊んだ生活を思い浮かべることができるものも多い。また、教授からは「どんな音楽の中にもダンスビートがある」ことを学び、後の作品に大きな影響を与えている⁸⁾。これは、ギロックの持っていた大きな感性と充分でなかった演奏テクニックを上手に活用でき、いい結果を生んだ⁹⁾。その後ピアノ教師としてレッスンを行っていた時期があり、子どもの指導経験が豊富だった。「大人っぽく深みのある音楽性」と「子供の指を知り尽くした運指のやさしさの両立を実現した¹⁰⁾」教育音楽作曲界のシェーベルトと呼ばれている。2017年はギロック生誕100年のイベントが行われ、ここ数年次々と曲集やCDも出版されている。それぞれの曲集の中に重複して掲載されている曲もあるが、主にレッスンの現場で使用されているものは出版が古い『叙情小曲集』、『子どものためのアルバム』、『発表会のための小品集』、初心者も取り組みやすい『はじめてのギロック』等であると推察される。ギロックの曲がこのように一般的に使用されるようになったのはいつ頃からであるかを調べる

ため、仁愛女子短期大学子どものための音楽教室（1978-2014）、NPO法人ふくい子どものための音楽教室（2015-2017）の発表会プログラムから初級、中級と思われる曲を抽出し、およそ10年を区分としてどの教本から取られたか、その割合を表23に示した。

表23 発表会のプログラムにおいて各主教材から取られた曲数の割合

年	主 教 材 名						総数
	バイエル	メトードローズ	オルガン・ピアノ	びあのどリーむ	トンプソン	その他	
1978-1988	7.2%	20.4%	0.0%	0.0%	5.0%	0.0%	539
1989-1998	0.3	4.3	2.1	0.1	0.7	0.3	682
1999-2009	0.1	1.1	2.5	4.6	0.1	0.3	610
2010-2017	0.4	0.0	3.0	13.0	0.0	0.6	470

注) その他は記載以外の教本（ラーニング・トゥ・プレイ、グローバー等）

表24 発表会のプログラムにおいて各時代、各作曲家曲集から取られた曲数の割合（%）

年	バロック	クラシック	初級クラシック	初級ロマン	近・現代	ソナチネ	ツェルニー	ブルクミュラー	ギロック	バスティン	日本人作曲家	その他	総数
1978-1988	3.1%	5.9%	9.2%	2.7%	2.0%	12.8%	4.2%	9.8%	0.6%	0.0%	3.0%	15.7%	539
1989-1998	2.5	7.0	19.6	2.5	7.2	9.3	0.1	5.1	4.1	5.0	5.3	23.0	682
1999-2009	2.1	6.9	14.8	4.3	5.6	7.2	0.6	10.3	9.5	5.6	9.0	15.1	610
2010-2017	1.9	4.3	10.4	4.7	3.6	5.3	1.5	6.8	14.9	5.3	9.6	14.7	470

注) バロック：リュリ、テレマン、バッハ等の小品
クラシック：ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの小品
初級クラシック：「クラシック」以外で子どものための作品を多く作曲しているフンメル、グルリット、ケーラー、エステン、ストーリーボック、リヒナー等の小品
初級ロマン：シューマン、ショパン、チャイコフスキー等の小品
近・現代：カバレフスキー、バルトーク、ショスタコーヴィチ等の小品
その他：外国曲、民謡を含む

年代が下がるに従って減少したのは『バイエル』と『メトードローズ』であり、特に後者は1970～1988年に2割あったがこの10年では皆無となった。このように、この40年間、特に1970～1980年代とそれ以降の間で、発表会用の曲をどの教本から選ぶかという傾向は大きく変化した。これは主教材として何を使うかが変わったこともその一因であるのかもしれない。

次に発表会プログラムに取り上げられた併用教材からの曲を時代的な分類、あるいは個別作曲家の曲集別にその割合を集計し、表24に示した。バロック、クラシック、初級クラシック、初級ロマン、近・現代の曲が取り上げられる割合は多少の増減はあるものの、大きな差は見られなかった。また、ピアノ発表会で定番とも言われるブルクミュラーの作品もこの40年間、大きな増減も無く取り上げられ続

けている。『ソナチネ』と『ツェルニー』に関しては年代とともに減少する傾向が見られた。一方、増加したのは日本人の作曲家と『ギロック』、『バスティン』であった。この中でも特に顕著な増加を見せたのがギロックの作品である。

表23、24からわかるのは、1980年代後半を境に、発表会で演奏される曲が『バイエル』や『メトードローズ』に代表される主教材から選ばれていたのが併用教材から選ばれるように変化したことである。つまり、1980年代後半までは発表会で演奏される曲の3割以上が主教材から選ばれたが、2010年以降では半減した。その流れの中でギロックの作品は2010年代以降に特に多く取り上げられるようになったと言えよう。ギロックの作品が初めて選曲されるのは1988年で『発表会のための小品集』からであった。この頃福井県では全国組織の子どものピアノコン

クールが盛んになり、課題曲として出され認知されるようになったことが一因であるとも考えられる。

ギロックの曲はわかりやすい構成、想像をかき立てる題名、魅力的な新鮮な響きを持つなど初歩の生徒でも満足できる曲が多い。また中級者にとっては広い音域、あらゆる調性に触れることができ、幅広いテクニックを身につける要素もある。バロック風、現代風の曲もあり、ロマン派への導入としても工夫された内容を持っている。これらを学習することにより表現の幅が広がり、多くの曲が短いと言うことから達成感を感じることができる。

昭和のピアノ教育は『バイエル』から始め『ツェルニー』、『ブルクミュラー』、『ソナチネ』といった教本を進度に従って使用し、ある程度進めば『ハノン』を併用していく形であった。初級の生徒の発表会においてはクラシックの小品を選曲することが多かった。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ロマン派の小品は難しいという生徒にとってメロディーもきれいで親しみやすく、リズムも単純、主要三和音を中心にした和声を使い、日頃練習している教本と相違がない初級クラシックの曲は選曲しやすい。これらの曲は、『ブルクミュラー』とともに現在も人気は高いが、一方では、初級でもピアノの魅力を感じさせる曲を書いたギロックがより多くのピアノ指導者、生徒に支持されることになる。

(3) 『バイエル』と『ギロック』との比較

前述のようにギロックの曲集は次々出版され、初歩のピアノ学習者のための全調で学ぶメソッド『ピアノ・オール・ザ・ウェイ！』全5冊もある。このメソッドは確実に音楽の理論と技術を一步一步身につけていくことと、「弾いてみたい」と思わせる音楽性の深い音楽と取り組むことにより感性を育てることを柱に、ほとんどがギロックのオリジナル曲と古くから伝わる伝統的な音楽で構成されている¹¹⁾。一切挿絵はなく楽譜を見て旋律、ハーモニー、リズムや曲想までを読み取り、イメージが浮かぶ力をつけることを目的としている。シャープ、フラットに対する嫌悪感がおきないよう黒鍵を使う練習や魅力的なハーモニーがついた連弾も最初から多い。

一方、左手と右手がひと続きになってメロディーを演奏するパターンが多く、基本的な伴奏形の練習はほとんどない。『バイエル』にあるような基本的な音階練習、主要三和音、終止形、伴奏のバリエーション、並進行、反進行などを徹底的に繰り返すことも少ない。特に初心者の学生にとって短い期間に集中的に繰り返すことによって身につくと思われるピアノのテクニックや伴奏付けの力がつくかは疑問である。保育の中で子どもの様子を見ながらピアノを弾き、自由に伴奏をつけ、子どもも保育士も音楽を楽しむ現場となることを目標とすると、学生時代は音楽の基本的な能力をつける教材を柱とするのが良いと考える。

以上の観点からすると、幼児教育を学ぶ学生に使用する場合においてギロックの曲はある程度基本的な能力がついた後に併用曲として取り上げるのには魅力的な教材であると考ええる。将来保育士として子どもたちに演奏を聴かせる機会があれば、子どもたちの想像力を刺激し、音楽の楽しさやピアノの音の魅力を共有し、伝えることができる場となるであろう。

9. 考察・検証

アンケート結果から、『バイエル』は主教材として依然根強く使用されており、特に大人初級レベルでは大部分を占めた。併用教材として、『バーナム』の使用率が高く、またテクニック強化目的として『ツェルニー』『ハノン』『ブルクミュラー』も使用されていた。『バイエル』に関しては、作曲者自身が述べている様に、子どもが1年または2年間で習得するための初心者入門の教材である。大人初級では大半で使用されていたアンケート結果からも、1年でピアノ演奏の基礎技術を習得しなければならない学生にとって適した教本であるといえる。その他の比較教材に関して、『バーナム』は短い曲でも一曲一曲に曲名が付けられ取り組みやすい。テクニック習得の面では、『バイエル』ではスタッカートやトリル等の曲が急に出てくる等、初心者には後半の急な進度が大変な部分があるが、『バーナム』はシンプルな音でわかりやすく学ぶことができるよう考慮されている。『ブルクミュラー』は、子どもの中

級、大人の中級で多く使用されている。進歩のために必要なすべての基本的課題が注意深くしかも計画的に織り込まれており、初心者には難しいが、曲想が分かりやすく、中級者の表現力を豊かにするために有効な教材と言える。『ぴあのどリーむ』『オルガン・ピアノの本』は、曲の全てにタイトルが付いて、カラーの鮮やかなイラストがあり、幼児や子ども向けには親しみやすい教材と言える。日本の童謡や各国の民謡、さらにオーケストラ曲の編曲や連弾もあり、さまざまな教本の長所を取り入れている。『ツェルニー』と『ハノン』は主教材と併用教材の幅広い層に使用されている。どちらの教材も、テクニック向上には適した教材ではあるが、少し高度で楽しく練習を続けるという意味では学生向けではないと考える。『ギロック』については、併用教材として支持されていた。わかりやすい構成、想像をかき立てる題名、魅力的な新鮮な響きを持つなど初歩の生徒でも満足できる曲が多く、また中級者にとっては広い音域、あらゆる調性に触れることができ、幅広いテクニックを身につける要素もある。ある程度基本的な能力がついた後に併用曲として取り上げるのには魅力的な教材であると考えられる。

以上の事から、『バイエル』は初心者向け教材として有効ではあるが、他の教材も各観点から優れた部分は存在する。

今後の課題としては、より良い学生初心者向けの教材として、その手順、必要な技術、分かりやすさ、楽曲説明等、様々な観点から分析を行い、各教材の抜粋による学校独自の一冊の教材作りを検討する。

引用文献

- 1) 安田寛著『バイエルの謎』(2012) 音楽之友社, 20
 - 2) エドナ メイ パーナム 大島正泰監修、中村菊子解説・訳『パーナムピアノテクニック導入書』(1975) 全音楽譜出版社, 2, 5
 - 3)『ブルグミュラー25の練習曲 徹底活用ガイド』(2015) 東音楽企画, 47, 64
 - 4)『ブルグミュラー25の練習曲 ウィーン原典版』(出版年不明) 音楽之友社
 - 5) 丸山京子『ピアノ教本選び方と使い方』(2017) ヤマハミュージックメディア, 70, 71
 - 6) 山本美芽『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』(2017) 音楽之友社, 96, 112, 113
 - 7) 高橋正夫『新版みんなのオルガン・ピアノの本』(2015) ヤマハミュージックメディア, 1, 14, 34
 - 8) 安田裕子『生涯-ギロックが歩んできた道「ウィリアム・ギロック」』(2017) 全音楽譜出版社 編, 4-9
 - 9) ウィリアム・ギロック (安田裕子 訳・解説)『ギロックの世界』(2013) 全音楽譜出版社, 2
 - 10) 山本美芽『ピアノ教本ガイドブック ～生徒を生かすレッスンのために～』(2017) 音楽之友社, 81
 - 11) ウィリアム・ギロック (安田裕子 訳・解説)『ピアノメソッド・ピアノ・オール・ザ・ウェイ!』(2016) 全音楽譜出版社, 5-6
- ## 参考文献・楽譜
- 1) 安田寛著『バイエルの謎』(2012) 音楽之友社
 - 2) 安田寛監修、小野亮祐、多田純一、長尾智恵著『バイエル原典探訪』(2016) 音楽之友社
 - 3) 山本美芽著『ピアノ教本ガイドブック～生徒を生かすレッスンのために～』(2017) 音楽之友社
 - 4) 松本倫子 (編) 音楽みみこ (解説)『新こどものブルクミュラー25の練習曲』(2013) 全音楽譜出版社
 - 5) 春畑セロリ (解説)『ブルクミュラー25の練習曲 解説付』(2006) 音楽之友社
 - 6) 田丸信明『ぴあのどリーむ』(1993) 株式会社学習研究社
 - 7) チェルニー 編 井内澄子『新編こどものチェルニー(第1巻)』(1994) 学習研究社
 - 8) チェルニー 編 不明『新訂 チェルニー100番』(出版年不明) 音楽之友社
 - 9) チェルニー 編 秋末直志『リトル・ピアニスト 解説付 New Edition』(2012) 音楽之友社
 - 10) ツェルニー 編 松本倫子『こどものツェルニー100番 効果的な24曲でしっかり身につくテクニック』(2012) 全音楽譜出版社
 - 11) ツェルニー 全音楽譜出版社出版部編『第1課程練習曲』(1967) 全音楽譜出版社
 - 12) ツェルニー 編著者 森本琢郎・池田恭子『ツェルニー練習曲(上) ツェルニー30番の前に』(1989) ドレミ楽譜出版社
 - 13) ツェルニー 編著者 内藤雅子『はじめてのツェルニー・ピアノ・スクール1 ツェルニー30番のまえに』(2017) デプロMP
 - 14) ツェルニー 全音楽譜出版社出版部編『100番練習曲』(出版年不明) 全音楽譜出版社
 - 15) ツェルニー 全音楽譜出版社出版部編『リトル ピアニスト』(1959) 全音楽譜出版社
 - 16) ハノン 著者 田丸信明『新編こどものハノン(上)』(1989) 学研プラス
 - 17) ハノン 編 松本倫子『新こどものハノン “しなやかで強い手”を育てる魔法の5分間練習』(2013) 全音楽譜出版社
 - 18) ハノン 校訂解説 寺西昭子 解説 門馬直美 編者 カワイ出版『ピアノ教本』(1980) 河合楽器製作所・出版部
 - 19) バイエル 全音楽譜出版社出版部編『標準バイエルピアノ教則本・併用曲付』(1955) 全音楽譜出版社
 - 20) 丸山京子『レッスンの効果を倍増させる! ピアノ教本 選び方と使い方』(2017) ヤマハミュージックメディア

転載許諾

楽譜 1 Edna-Mae Burnam : Stretching

楽譜 2 Edna-Mae Burnam : Bouncing A Ball

楽譜 3 Edna-Mae Burnam : Deep Breathing

以上 ©1957 by The Willis Music Company

Assigned to Zen-On Music Company Ltd. for Japan

全音楽譜出版社刊「バーナムピアノテクニック 導入書」より

転載許諾

楽譜 4 Edna-Mae Burnam : Fit As A Fiddle and Ready To Go

©1950 by The Willis Music Company

Assigned to Zen-On Music Company Ltd. for Japan

全音楽譜出版社刊「バーナムピアノテクニック 1」より転載許諾

図 2、3 高橋正夫『新版みんなのオルガン・ピアノの本』(2015)

ヤマハミュージックメディア より転載許諾